慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	George B. Mangold, Social pathology, New York, 1932.
Sub Title	
Author	小島, 栄次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.2 (1933. 2) ,p.311(93)- 323(105)
JaLC DOI	10.14991/001.19330201-0093
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330201-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

George B. Mangold, Social pathology, New York, 1932.

小島榮次

「社會病理學」が社會學の一部門として唱道されたのは既に過去のことに屬する。それは社會を一個の有機體と看做し病理學の體系を適用して、社會的「疾病」の症狀・原因・結果を研究するものであつて、Paul von Lilienfeld, Gedanken über die Socialwissenschaft der Zukunft. 5 Bde. Mitau, 1873-1881. La pathologie sociale. Paris, 1896. Albert G. Fr. Schäffle, Bau und Leben des socialen Körpers. 4 Bde. Tübingen, 1881. René Worms, Organisme et société. Paris, 1896. 等が著され社會有機體說が勢力を有して居た時代の用語であつて、その後社會の分析に生物學的類推を行ふ方法の不合理が認められるに至つてからは、「病理學」なる生物學的概念を社會學に適用することも自然一般に容認されぬやうになつた。表題の書に對しても「米國社會學雜誌」の新刊書紹介欄に於いて一紹介者は次の如き非難を加へて居る。それはこの書に對するよりもむしろ「社會病理學」一般に對する批判と見られるから、多少長きに失するけれども此處に譯載すれば次の如くである。「醫學その他の生物學的科學に於いては、病理學なる名辭はかなり明確なる概念內容を有し、又思索體系に於いて實質的の位地と職能とを有して居る。それは過程と狀態との孰れか或はその双方かを意味する。狀態としては、それは有機體或はその諸部分中の或るものに於いて生活諸機能に何等かの故障が生じた狀態に關する。過程としては、それは有機體が健康狀態から離れ最後には破滅に至る所

の連續した階梯を意味する。これと關聯した意味に於いてこの名辭は生物學のうち疾病の起源・過程・及び結果を取扱ふ部分を指す。社會的實在性の論究へこの名辭を持込まうとする企圖は甚しい失望を齎して居る。それは研究者をして、彼等がその思索にこの概念を實際に使用する限り、言葉の上での一切の否定にも拘らず、組織體としてよりはむしろ有機體としての社會なる概念に陷らしめたのである。病理學的の狀態及び過程は有機體の福祉にとつて有害でありその生活過程を破壞する狀態及び過程である。病理學的狀態或は過程とは或る標準に對して云はれるのでなければ無意味である。即ちそれは一定の健康の基準を豫想する。然し若しも社會が生物學的な意味に於いて有機體でないならば、それが「病氣」である或は「健康」であるとあからさまに云ふか或は暗にその意を述べるかすることは、類推的使用法の如きがそれから生ずるやうに見える所のその同じ精神的混亂を增大せしめるやうに見えるのである。社會學の關心は人格・社會組織に在りそれらの相互作用・相互依賴に在る。人格の成全に達する諸階梯を、諸種の水準に於いて及び種々の價値に就いて明かにすることは可能であるし、又人格の變化及び分解の諸階梯を隔離することも可能である。同樣に社會的及び文化的破壞の諸過程を研究することは、社會的及び文化的成全の諸過程を研究すると等しく全く正しい。選び出した諸過程だけを隔離しそれを規定することは病理學の關心事であるが、それは一般には社會病理學の關心事となつては居ない。紹介者の知る限りに於いては、抽象的な科學的な態樣に於いて社會病理學の分野を決定する試みはなされて居ない。社會學發展上の現在の科學段階に於いてはさうすることは多分可能でなからう。諸種の貴重なる研究及びモノグラフ風の報告が、非社會的・悖德的・生來犯罪者的・及びその他の變質人格及び行動の諸型に就いて行はれては居る。然しこれらの科學的勞作は社會病理學の如き概念に對しては何等の必要をも感じないやうである。他の研究家に在つては、類推的名辭使用法は、極めて僅かの例外を除いて、名辭が科學的概念から評價的概念に變形させられたと云ふ結果を齎して居る。然らば客觀的基準の欠除して居る以上、それは研究者の偏見を活躍せしめその感受性を刺戟する如何なる狀態又は過程にも適用される。」（E. B. Reuter in American Journal of Sociology, Sept., 1932, pp. 285-6.）

我國に於いても「社會病理學」的見解の下に社會問題研究に從事した研究者として安部磯雄氏を擧げることが出來やう。氏はその「社會問題概論」（大正十年）に於いて次の如く述べて居られる。「今日の社會學者は社會を一の有機體であるかの如く見て居る。私共の身體が筋肉、神經系統、呼吸機關、消化機關等によりて組織せられて居る如く、現今の社會は複雜なる機關に依りて成立して居る。」（五頁）「社會學の社會に對する關係は恰も身體に對する生理學の如きものである事を何人も了解するに相違はない。生理學は身體の全部を研究する所の科學であるが、社會學も亦社會の全般に亘りて研究をなす所の科學である。更に社會學と生理學との類似點を擧ぐれば次の如くである。生理學は主として健康狀態にある身體を研究するが如く、社會學も亦常態にある社會を研究することを目的として居る。勿論生理學と雖も病態にある身體を全く度外視するのではない。然し主として病態にある身體を研究する時は最早生理學の領分といふよりも寧ろ病理學の領分といふのが適當である。これと同じく社會學も亦病態にある社會を研究することがある。然しこれを主として研究する場合には社會學と云ふよりも社會病理學と云ふ名稱を用ふることが適當であると思ふ。言ふ迄もなく社會病理學は社會學の一部であるけれどもその研究範圍は頗る廣大であるから、今日は殆ど獨立の研究問題となつて居る。而して社會問題なる語は社會病理學と同一の意味に用ゆべきであるけれども、前者は後者よりも廣く世間に通用して居るから私は今後專らこれを用ゐることにする。更にこれを說明すれば、社會問題は病態にある社會を研究し、其疾病の原因を討究すると共に其救濟法をも取扱ふ所の科學であ

る。」（二三―一四頁）斯くの如き見解及び社會病理學一般に對しては、前掲の「米國社會學雜誌」に於いて紹介者の云つて居る所は妥當であると考へられる。然しマンゴールドの著書に對しては適切なる批判であるとは云ひ難い。蓋しマンゴールドの「社會病理學」は單なる社會問題及びその解決策の研究に過ぎぬやうに思はれるが故である。マンゴールドは「社會病理學」なる概念に就いては一言も說く所がない。これに反して Stuart A. Queen and Delbert Martin Mann, Social pathology, New York, 1925. は「社會病理學」とは何ぞやの問に對して「我々の關心する所は、人々が――個人・家族・共同體・或は國家として――次に何をなすべきかに就いて困惑せる事態である。殊にこの當惑が長期にわたつて繼續する爲め個人の人格或は集團の連帶性に脅威を與へる場合である。何等かの困難を解決することが出來ず一人格が分解してしまふか或は集團がその道德性を失ふ時には、個人或は集團は單に當面の問題を解決し得ぬのみならず、新しき事態の發生に際してそれに應ずる能力を失ふ傾向を生ずる。我々が社會的病理學的狀態と云ひたいのは斯くの如き狀態なのである。」(pp. 658-659.) と答へて居る。而して全卷二十九章を家族的分解及び人格的不道德化・社會的分解及び人格的不道德化の經濟的局面・同上の生理的局面・結論の四部に分つて、とも角體系を具へんとする努力が示されて居るが、然し右に引用した部分以外には「社會病理學」なるものを規定しその體系に就いて論ずる所は全く見出されない。從つて彼等は「社會病理學」を以つて、集團の組織破壞と人格の不道德化との狀態・過程・及び對策の研究と解したものと推定するの他はない。マンゴールドに於ては斯かる點に關しての論考が皆無であり、諸社會問題の取扱に何等の體系も見出されぬが故に、彼が舊き「社會病理學」に據つてないことは明かであるが、さればとて新しき「社會病理學」樹立を目的として居るのでも全くない。マンゴールド・クヰン及びマンの二著に先立つて米國に於いて著された Samuel George Smith, Social pathology, New York, 1911. は、この二著の行つて居ない人體疾病と社會的集團の「疾病」との類同視を行つて居る。例へば「丁度固定的觀念が個人に於いて永久的狂癲を生ぜしめ得るが如く、固定的觀念の社會的影響は集團に於いて一時の狂的行動を生ぜしめる」ことを指摘し、又社會的集團のヒステリ・憂鬱症等を認めて居るが如きである。(pp. 5-6.) 斯くしてスミスに於いては安倍氏の場合に於けるが如く、「社會病理學」の概念をそれが社會有機體說の主張者に依つて唱道された儘に容認して居ると云へるが、マンゴールド・クヰン及びマンに於いては學的體系としての舊き「社會病理學」は無視され或は避けられて居る。即ち米國に於いて一九一一年以後に著された「社會病理學」なる三著作の內、最初に著されたものは舊き「社會病理學」に據り、第二のものは獨自の概念規定を行ひ第三のものは表題に用ひたのみで內容は「社會病理學」では全くなくなつて居る。然らば彼等がその著書に於いて企圖した所は奈邊にあるか。マンゴールドの企圖する所は彼自身に從へば次の如くである。「著者は社會病理學の領域から選まれたる資料を呈示し、人間行爲を形成し、又變形せしめる所の社會學的・經濟學的原則に照してそれを考察しようと試みた。この資料の呈示に於いては彼の見地は主として客觀的であつた。現社會狀態の意義の解釋に於いては、彼は社會改良運動の指導者達の思想及び靈感を援用し彼自身の意見も躊躇する所なく開陳した。その結果として客觀及び主觀の會心の混成が生み出されたかと思ふ。然らざれば研究者は常に宙に漂ふ儘に置かれ又果して建設的なプログラムが可能であるか否かに迷ふが儘に放置されるであらう。」(Preface, p. vii.) 即ち著者は現代に於ける主要な社會問題の社會學的・經濟學的分析を行ひ、併せて從來企てられ主張されて來たその解決策と自己の解決案とを呈示しようとしたに他ならぬ。社會なる「有機體」の疾病に對し病理學の體系を樹立しようとして居るのではない。又クヰン及びマンも「我々自身の目的とする所は、或種の困難な事態をそれらが表面に現るゝが儘に取り上げ、それらをその構成要素

に分析し、主として社會學の見地よりそれらの意義を論究することにある」(Queen and Mann, op. cit., preface p. vii.)と云つて居る。斯くの如くこれら二著にあつては表題こそ「社會病理學」であれ、その內容に於いては明かに從來のそれと相違して居るのであるから、斯かる表題を附したことの是非はとも角として、前揭マンゴールドに對しての「米國社會學雜誌」に於ける批判の如きは當を得て居るとは云ひ難い。然らば何故に「社會病理學」なる表題が使用されたか。勿論我々はこの間に答へられぬけれども、少くともその理由を推定することは出來る。即ち「社會病理學」はクヰン及びマン或はマンゴールドその他の勞作の如き今日の社會問題研究の母體であつたことは爭ふべからざる事實であつて、これら今日の研究は多くのものを「社會病理學」から受け繼いで居る。例へば彼等の意圖は「社會病理學」提唱者のそれと等しく社會問題研究をその解決策發見の基礎とし行ふことにある、リヽエンフェルトはその著「社會病理學」中に「社會治療學」La thérapeutique sociale を取扱つて居る。又兩者とも社會改良主義の立場に據つて居り、社會政策的・社會事業的・施設を主張する。スミス・クヰン及びマン・マンゴールドの三著が社會事業家の見地から著されたことは、スミスがその著を「慈善及び矯正の諸問題研究に對する諸見地の附與の爲めの努力」(Preface, p. v.)とし、クヰン及びマンは「後に例へば個別社會事業・近隣及び市町村事業・犯罪學・兒童保護及び社會事業組織の如き專門的・技術的課目を習得せんとする學生に對して有用なる敎科書」(Preface, p. viii.)を提供しようと試みたのであり、マンゴールドは「社會工學者及び社會事業家」の活動目標を示して居る(p. 10)ことから明かである。即ちこれらはすべて社會問題の廣汎なる視野を提供することに依つて、社會事業家の行動に對して正しき指針を與へようとするものに他ならない。諸種の社會問題が相互に密接に關聯して居る以上、社會事業家その他社會福祉運動に携る人々は、自己の直接に當面する問題と他の問題との關聯に就いて適當な知識を有しない限り、その努力が無益に終り或は却つて有害となる危險すら存在する。マンゴールドその他の如き著書は、斯かる危險を排除し社會事業家の努力を正しき方向へ導く上に於いて重大な貢獻をなすものである。更にクヰン及びマンゴールドが社會事業に關する他の著述を有することも彼等の著作が右の如き見地からなされたことの追加的證左として看做すことが出來やう。(Queen, Social work in the light of history, Philadelphia, 1922. Mangold, Problems of child welfare, New York, 1924.) 次に又クヰン及びマンもマンゴールドも社會問題の社會學的研究を行はうとしたことは前に引用した所から明かであり、その點も社會學の一部門として提唱された「社會病理學」から受繼いだものと見られる。斯くの如くその意圖・その方法その他を受け繼いで居るとすれば、「社會病理學」と云ふ名稱も、斯かる名稱の主要な理由たる人體病理學の社會的「疾病」に對する類推的適用が行はれなくなつた後に至るまで、受け繼いで居ることはさして不自然ではない。加ふるに特にクヰン及びマンにあつては、彼等自身の「社會病理學」概念を有することは前述した所である。然し乍らたとひ斯くの如き理由が推定されても、斯かる表題をマンゴールドの書に用ふることの是非を考へることになれば、結局斯かる理由の有無に拘らずそれは非であるとせざるを得ぬであらう。

上述した所に依つてマンゴールド「社會病理學」の著された立場を一應明かにし得たと思ふ。以下その內容を一瞥しよう。著者は先づ緖論として社會福祉運動の諸動機と目標とを述べて居る。即ち宗敎的・人道的・知的・政治的の諸動機であつて、目標として示された所は生命の尊嚴・生活の安定・人格の發展である。「我々は未だ社會統制の具體的目的を見出して居ない。且つ又それに對する人の態度は區々で、權威ある敍述は不可能な狀態にある。」(p. 9.)「けれども社會工學者及び社會事業家に對しては或る目標が定められ得る。これらの目標は修訂を要し恐らく擴

大を要するであらうが、近き將來は次の如き諸方向に向つて成就を要することが確かである。」(p. 10.)即ち生命の尊嚴を認めそれを實現すること・生活の安定化・人格の發展の三方向であり、以下諸種の問題を取上げてこの三目標達成の見地から考察を進めるのである。然し全卷を通じて改良主義を以つて一貫し、最後まで一言も社會主義又は社會主義的方策に言及した所はない。第二章は米國に於ける富の分配を取扱ひ、一方少數者の手に巨富が集中され巨額の年所得が見らるゝに對し、他方多數者の資産及び所得が極めて少額なる事實を指摘して居る。又一八四九年には生産物價値の二三・三パアセント・使用原料に對して附加された價値の五一・一パアセントを勞働が得て居たに對し、一九二九年には生産物價値の一六・五パアセント・原料に附加された價値の三六・二パアセントに減じて居ることを他の研究から引用して示し、斯くの如く「勞資共同生産物の内勞働の得る割合が減退しつゝあるのを見れば、資産に於いても所得に於いても重大な惡分配狀態が必然的に結果する。」(p. 33.) 多數の生活苦の增大・その不滿は最後に重大な社會的混亂を招ぐが故に、自由放任の經濟政策を放棄してより良いより廣い生産物の分配・現在見るが如き巨富の集中の防壓を行はねばならぬとして居る。それに對する具體的方法の考察は貧困絶滅策に關する後章に於いて行はれ、そこでは稅制改革・高賃銀・勞資協力生産等が擧げられて居る。次に第三・四及び五章は貧困及びその救濟方法・貧困絶滅策に關するもので、本書中最も著者の力を注いだ所の如くである。先づ第三章は大部分困貧の原因探求に捧げられて居るが、著者はその一次的原因として生産過少・個人的不能力・人間の本質的利己心の三を擧げ、第二次的の原因として戰爭・人口過剩・産業上の不調節（需要供給の不調和・資本の勞働に對する專制・等）・詐欺及び欺瞞・濫費及び浪費・貧困者の過大の負擔（高利・高率の訴訟費用）・個人的惡德及び習性・疾病及び生理的不能・その他不利なる事態（無知・不幸なる結婚・等）・等を擧げて居る。第一次的原因とは著者に從へばその可能性の一層重大なものであり、第二次的原因とは人間の努力に依つて比較的容易に克服さるゝものである。次に第四章に於いては貧困絶滅の方法として、生産額の增大・計畫生産・私有財産の社會理論の承認・所得獲得能力の社會理論・資産及び所得のより良き分配・人口制限・肉體的精神的型の改善・の第一次的方法と、戰爭の排除・酒精排除・所得の賢明なる支出・疾病に對する施設・事故防止・失業防止・一家の主なる稼ぎ手の亡失に對する救濟・の第二次的方法とを擧げて居る。此處に私有財産の社會理論と稱せられるのは、私有財産權を社會的必要の正統の結果と認めつゝもそれに對する個人主義的な見解を排して、社會的正義の理想の遂行に適切ならしむるやう私有財産の範圍・用法に就いて必要な統制を行はねばならぬと云ふ理論である。又所得獲得能力の社會的理論と云ふのは、最低賃銀制度その他に依つて所得の公正を期する爲め社會統制を必要とする主張である。著者は以上すべての方法に依つて貧困が絶滅されることの可能を信ずる。文明の進歩が一定の段階に到達してその社會の成員全體に相當な生活資料を與へ得る狀態に至らぬ内は、生存の爲め絶えず鬪爭が行はれねばならぬ。然しひと度社會がその成員全體に對して相當程度に物質的並びに精神的要求を滿足せしめ得る能力を獲得すれば、生存競爭は終結し得るものでありその代りに協力的努力が優勢を占むるに至るのである。西洋諸國は大部分この段階に到達して居るのだから今日では貧困の存在はこれらの國にとつて恥辱であるとして居る。(pp. 67-8.)第五章は斯かる夢想的大プログラムではなしに現實の貧困對策の主要部分たる要扶助家族の救濟方法を考究する。第六章以下に論ぜられて居る所を項目だけ簡單に紹介すれば次の如き多種多樣の項目にわたつて居る。即ち要扶助兒童・老年者・事故・兒童勞働・失業・肉體的精神的欠陷及び疾病・健康增進・精神衞生・犯罪・兒童の行動問題・生活標準・家族・移民人種間の關係・人種改善・社會立法等である。著者はこれらすべての問題に就いて出來得る限りその狀態・原因

・結果・及び對策を論ずることを忘れて居ない。而して最後の一章に於いて社會問題及び社會改良運動の將來を考察して居る。

勿論著者はこの書に就いて幾多の非難を受くることを免れない。曩に引用した「米國社會學雜誌」に於ける紹介者は、この書がその結論に於いてもその見地に於いてもその組織に於いても、何等新しいものを示して居ないことを指摘し、又その論究が常識を超えずその見地は感情的・治療的であり問題の呈示し方は極めて皮相的であるとして居る。(Amer. Journal of Sociology, op. cit., p. 286.)筆者もこの非難が大部分正しいことを認めねばならぬ。例へば貧困の主要原因の一として生産過少を擧げ從つて貧困絶滅の主要手段の一として生産增大を擧げて居るが如きは、今日の文明國に對しては全く無意味であり著者の考究の不充分なることを感ぜしめるし、又社會主義の見地に對して何等の考察も行はず、私有財産制度是認に當つてもその反對論に對する考察が全く欠けて居るが如き（pp. 71-73.）不滿の點は少くない。又この書が舊い「社會病理學」の體系に據つて居ないことは前述した所であるが、然らば何等かの體系を――「社會病理學」の何等かの體系と限らずとも――有して居るであらうか。前述の內容概觀に於いて明かなるが如く富の分配から始まつて社會立法に終るまで多種多樣の問題が盛られて居るが、全卷二十八章をその以上に編に分つでもなく總論風の一章を設くるでもなく各章相互間の論理的關聯を表す努力は全く行はれて居ない。然も著者自身諸種の社會問題相互間の密接な關聯を認めて居るのであるから(Preface p. viii. p. 35.)、社會問題研究に何等かの體系が必要であることも認めて居るに相違ないのである。これに比すればクヰン及びマンの「社會病理學」は前述の如く全卷二十九章を四部に分つて、とも角體系を具へんとする努力が示されて居る。

斯くの如くマンゴールドの「社會病理學」は幾多の重大な欠陷を藏しては居るけれども、然も社會福祉運動に關心を有する者殊に社會事業に從事し或は從事せんとする者に對して、社會問題及びその對策に就いての廣汎なる視野を與へ以つて自己の仕事の意義を認識させ、且又その行動方針に就いても正しき指示を與へ得ると思ふ。又約七〇〇頁の間に重要な諸問題を全部網羅し猶且つその對策の批判的敍述を行ひ得て居る點推賞に値する。まことに手頃の書と云ふべきである。この書が社會事業關係の事項に對して特に敍述が懇切であり、社會政策・經濟政策に屬する事項例へば私有財産權の制限・賃銀統制・富のより良き分配狀態を目的とする稅制改革・計畫生産の如きはそれぞれ二・三頁の內に論ぜられて居るのは、この書の性質上當然のことと云はねばなるまい。本來教科書として著されたものと見えて各章末に演習問題及び參考書目が附せられて居る。學生殊に米國の學生はこれに依つてあらゆる重要な社會問題に就いてひと通りの知識を得ることが出來、社會福祉運動に於ける將來の自身の活動の意義及び方向に就いて教へらるゝ所多大であらう。筆者が幾多の欠陷を認めつゝもこの書を紹介する理由もこの點に關して居る。即ちその理由と云ふのは先づ第一にこの書が昨一九三二年四月の出版で筆者が近頃讀んだものであること、第二に、表題の是非は別として斯かる內容を有する勞作が未だ我國に現れたのを知らず、且つ斯かる研究の必要を感ずるが故である。米國に於いては前述の如くこの書以前にクヰン及びマン及び・スミスの二著があり、殊に前者はこれらの內で比較的に最も整然とした體系を有する。同書に於いては諸種の困難な事態を捉へ來たつてそれらをその構成要素に分析し、主として社會學の見地よりそれらの意義を究明することが目的とされて居る。即ちそれらの問題に含まるゝ肉體的・精神的・經濟的・及び社會的因素を指摘するに當つて、諸種の見地及び技巧を取入れるが全卷を通じて最も重きを置いたのは社會學的の究明である。(Preface, pp. vii-viii.)米國の社會學は、單數の・定冠詞の附く社會問題即ち普通に社會問題と呼ばれて居るもの一切を包含する廣い意味での社會問題を認め、人に依つて例へば

社會問題とは即ち階級對立の問題・或は勞働問題・或は婦人問題・或は遺傳問題とそれぞれ異つた解釋を有するが、米國社會學は斯かる狹い解釋を排斥する。同時に數多の問題の相關關係を認めてその內の一を他より隔離して解決することは不可能なりと主張する。（Charles A. Ellwood, The social problem: A constructive analysis, New York, 1915. pp. 8-14. Hornell Hart: What is a social problem ? Amer. Journal of Sociology, Nov., 1923. p. 349.）斯かる立場をとることは、社會事業家に對し行動の指針を與ふることを以つて主たる任務とする前揭三著に於いて一層有益であるのみならず、社會問題の一般的研究書にあつても廣汎な偏らざる知識を讀者に與ふるが故に極めて望ましいことである。米國に於いては社會問題の斯くの如き一般的研究書が數多く出版されて居る。例へば J. H. S. Bossard, Problems of social well-being, New York, 1927. H. W. Odum, Man's quest for social guidance, New York, 1927. J. L. Gillin, C. G. Dittmer and R. J. Colbert, Social problems, rev. ed., New York, 1932. 等である。我國に於いては筆者の寡聞の故か、マンゴールド或はクヰン及びマン型の著作もなければ右に擧げた一般的研究書型のものもない。最もマンゴールド型に近いかと思はれるものは前揭安倍磯雄氏の著書であるが、この書に於いては勞働組合運動・社會主義等の論述に意が注がれて居り、他方兒童問題その他社會事業に直接關係の深い多くの事項が欠けて居て結局社會事業家の見地より書かれたものとは云ひ難い。一般的研究書型に似たるものも筆者は知らない。河田嗣郎博士の「社會問題體系」（大正十四—昭和五年）は六卷と云ふ相當大部のもの乍ら體系は事實上殆ど無く「社會問題の意義は廣く之を解釋し乍らも、その攷究上の中心はやはり勞働問題」に置いて居る。（第一卷序文二頁）筆者は、社會問題の一般的研究書としても或は社會事業家に對する指針としても、孰れに於いても我國に於ける諸社會問題を包容し個々の問題の相關關係を明かにする廣汎な勞作の現れることを切望する。最後に一應注意して置きたいことは、今までに擧げた著書はすべて社會改良主義に立脚して居るが、マンゴールド型或はクヰン及びマン型の著作を行ふとしても、必ずしも改良主義に立脚せねばならぬ必要はなからうと思ふことである。社會主義から出發して現代の諸社會問題を捉へて來、それらに對する施設を考察して社會事業に指針を與ふることも可能であらう。（昭和八年一月二十五日）